

---

お兄ちゃんのことなんか、夜の学校に忍びこんでも、ぜんぜん好きじゃないんだからねっ!!

田中数奇

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お兄ちゃんのことなんか、夜の学校に忍びこんでも、ぜんぜん好きじゃないんだからねっ！！

### 【ZIPコード】

273265

### 【あらすじ】

お兄ちゃん大好きな変態的な妹と、ストーカー気質の腹黒幼馴染をもつ性欲旺盛な童貞高校生高梨修輔。  
そんな彼がペニトと飼い主関係であるといふのクラス委員長、近藤繭香の大事なものを学校に忘れてしまい……  
ドタバタギャグものです。

ある日の学校。高梨修輔は珍しく、一人ぼんやりと屋上から空を見ていた。

天気は晴れもよう。風は気持ちよく頬を撫で、学生の喧騒も遠くに聞こえる。

あぐびをしながら、平凡な学生らしい時間を噛みしめていた。いつもならば、クラス委員の近藤蘭香とあれこれ話している時間であるから、珍しいと言えば珍しい。もつとも、昼食を一人だけで取るという関係ながら、残念ながら彼氏彼女という関係ではない。

実は今彼は美少女クラスメイト委員長のペツトなのである。弱みを握られ、やむにやまれずペツトとなってしまった以上、もはやあんなことやこんなことをされても文句は言えないのだ。仕方ないのだ。つらい立場なのだ。分かつてくれ奈緒！

などと胸の内で妹に謝りつつ、そのゆるみきつた顔からはなんらストレスは窺えない。

それもそのはずで、彼の主はドガツクほどのお人よし、修輔に無茶は言わせないし、傍若無人な態度もとらない。それでいて美少女であり、きちんとやり遂げればご褒美をなんやかんやてくれるのだ。このまま永久就職できないかと、真剣に考え始めるレベルである。そんな魅惑の調教ライフにおぼれる修輔である。心にも余裕が出来る。

空に浮かぶ雲を眺める表情も、穏やかそのものだ。

自由な心は自由な想像力をはぐくみ、修輔は想像の翼をはためかせる。

(ああ、あの雲・・・・・近藤の黒ストに似てるなあ)

(あの形は、近藤のつま先に)

（あつちむ、消しゴムを拾つ時のむしつかな。あ、あつちむ。・・・・・）

常人には理解できないレベルの連想によって、空にたゆたう雲をえも欲情の対象にしてしまう始末だった。

高校生男子の妄想力はまさに留まることを知らなかつた。熱中する

（あれは、ふくろうだ。ええと それでくものかたちは・・・・・ 形は・・・・・）

そのなんとも複雑な形をした姿を見て、脳裏にめりめりと浮かんでくるモノがあつた。

「ほら、受け入れるよ。俺のエクスカリバー」  
「そ、そんな……僕のゲートオブバビロンには、入んないよ」  
「ほり、遠慮するなって。ほーら……」  
「あ、ああ、ああん、ワリテッド、ブレイドワークスううう——

「は！」と、ヤマ場に入つたところで我に戻る修輔。いかん。昨日近藤から押しつけられた本の内容がフラッショバックで襲つてきた。

つい先ほどまでのホンホンとした気分はすでに微塵もない。残つて  
いるのは追いつめられたネズミのように速まる動悸と、体をべとつ  
く脂汗だけだ。

彼の主、近藤繭香に欠点があるとすれば、彼女の嗜好性のみだろう。B-L好き。はたして世の殆どの男が拒否反応を示し、尻が痛くてとても見ちゃいられないファンタジーの世界を、彼女は愛好していた。

そんなわけで、ペットである修輔にトされたる最大にして最悪の命令は、「どこのどきつこB-L本買って!」というものになる。しかも最近はどきつことか、その買って本を修輔にまで勧める始末だ。

そんなわけで、修輔の頭の中にも自然とそうした妄想の苗床が出来てしまつという始末だつた。

(駄目だ、オレ……おかしくなりつつあるのかもしねない)  
まるで自分が常識人であるかのような厚かましい台詞を脳内で思いながら、ため息をつく修輔。

どういうプレイの一環なのか見当もつかないが、このままでは自身にもよくない影響がでるかもしねない。

(このままいくと、変な性癖に田覚めるおそれも……)  
そうして豊かな妄想力によつて、思わず自分が男友達とアレやコレやをしている姿を想像してしまつ。

(うはあああ)

このままでは駄目だ。絶対、駄目だ。駄目絶対!お尻の穴は、便意を解消するためにだけあるべきなのだ!他の目的に使つちゃあいけない。

このままでは、自分は駄目になる。

早く、自分の世界に帰らないと。

よし。

握りこぶしを作り、決意を新たにする。

今はあのB-Lデビルも、委員会でいない。今のうちに、学校に置いてあるお宝本でも見て心の平穏を取り戻そう。俺は、俺はノーマルなんだ!女の子が好きなんだ!

そんなはたから見ればどうでもいいことを一人こちながら、屋上を下りていく修輔だった。

そんな姿を見つめるものがいるとも知らずに。

\*

そんなわけで、修助は学生鞄<sup>ご</sup>とエロ本を持って、最上階の空き教室まで移動していた。クラスを分けて授業する時などに使ひ部屋で、普段使う人間はない。

このところ、AGEの面々は何となく距離をとつてこむように感じる。それが委員長との蜜月が原因だとは、今の修輔には思ひ至らないのだが。

ともかく、なんとかテンションを戻さなければ。このままでは、生物の教科書の人体図にまであらぬ妄想をしてしまいそうだ・・・・・。

・。な、内蔵でぢやうう（「」）

などと取り越し苦労をしながら、一人になれるはずの空き教室で、至福の時を過ご<sup>ご</sup>すべく本を開く……。

（ああ。俺にはまだ、帰る場所があるんだ……）

などといつ実感に浸る暇はなかつた。

「あれ、お兄ちゃん。何やつてるのこんなどうで」

「な、奈緒！おまえこいつたいぞ、どうしてー！」

私服の時は長く続かなかつた。よりもよつて、現在高梨修輔が会いたくない人物N・O・1が現れたからだ。

高梨奈緒。彼女は修輔の妹であり、身内にバレるという健全な青年にとつては地獄のような事態への切符でもある。他にも修輔自身が抱く想いのあれやこれやからも、自身の性癖は知られたくない人物としてトップに君臨<sup>くんりん</sup>している。

とにかく今自分が持つていてるものが何なのか、ばれるわけにはいかない。

背中に鞄にだらだらと冷や汗が染みつく感覚を覚えながら、修輔は

深呼吸した。落ち着け、クールに行くんだ。

「私は向こうの移動教室に忘れ物しちゃって。そんで、お兄ちゃんみたいな人が歩いてるの見たから。お兄ちゃんにそどうしたの？」

「い、いや、別に、その……たいしたことじゃ、なくって……」

舌がうまく回らない。ぐくそ、よりにもよりて妹モノのH口本なんか持つてくるんじゃなかつたよおー。

「ふうふ。じゃあ、どうしてそんなに拳動不審のかな？かな？」

奈緒が怪しむのも無理はない。だがしかしこれ以上、妹に悪影響のある本を見せるわけにはいかない。べ、別に自分の為じゃないんだからね！

「べ、別に……。おれもまあ、奈緒と同じ理由だよ、忘れ物忘れ物」

「くえ・・・・・・お兄ちゃんたちも、一番上の階で授業あつたんだ？」

あばあばばば。早くも脳内ヒューリックが放熱処理に耐えきれずフリーズしそうになる。ぐつ、まづい。」そのままでは奈緒が、奈緒がお兄ちゃんのことを変態だと思つてしまつー。

妹の前では、真面目でしつかり者の兄貴としてふるまわなければ！じりじりと迫つてくる奈緒に後ずさりながら、修輔は必死に頭を働かせる。

「べ、べつにどうに行こうが俺の勝手だ！」

「……怪しげなあ」

「な、なんだよ。と、とにかくお前がおもつてゐるようなことはないからな、ほんとだからな、じゃー！」

奈緒から視線を外さないようじつて、カ一歩きで後ろの戸から教室を出よつとする修輔。

よし、奈緒はめちゃくちゃ不審な視線を向けているが、これでいい。ここからブツをもつてでられさえすれば、後はなんとでもなるぞ。そう思いつつ、修輔は廊下への一歩を踏み出やつとした。

「しゃーつかやん。どうしたの？」

「わあ。ど、声に出しゃうになるのを辛うじてうらやむ。

会いたくない人物№02・土浦彩葉だ。

昔修輔とのアレコレがあつた末に時分につきまとつシインテル美女だ。本来ならうれしいシチュエーションかもしれないが、あまりにアグレッシブかつぶつとんだアプローチの数々に、修輔は辟易していた。童貞には早すぎる。

「お、おまえまでどうして」

「奈緒ちゃんに、次の授業のテスト範囲聞こいつと思って。そしたら偶然、修ちゃんと会えて……彩葉、うれしい」

そう言いながら、抱きついてくる彩葉。

修輔は態勢を崩し、そのまま机を巻き込んで床に倒れ込んだ。

頭を椅子の足にぶつけ変な声が出たが、馬乗りになつた彩葉はそんなことを気にも留めていない。基本的にこついう娘なのだ。

「修ちゃん……ここなら、邪魔は入らないよね」

「い、いや彩葉ちゃん。私居るんだけど！」

奈緒の突つ込みもどこ吹く風で、彩葉は無駄にエロイ顔つきで修輔の体に手を這わせる。

「ふふふ、もういけない子ねえ。寝てるのか、立ってるのか、はつきりしちゃつてよお」

「彩葉ちゃん、その下ネタはオヤジ臭いよ！」

そんなボケ突つ込みの隙を見てなんとか這い出し、脱兎のごとく教室を出た。

「どうしたの、修ちゃん！？彩葉を置いていくの？」

「お兄ちゃん、こら、まだ話は終わつてないつて！」

「か、勘弁してくれ！」

修輔は鞄を胸に抱きながら、必死の逃避行を始めたのだった。

\*

（ああ、お兄ちゃん。すごい、すごいよ。なんていうボキャ品……  
・・・！す”ぐ、バカっぽい！）

と、やはりお見通しの奈緒は、愛も変わらず去つていつた修助の慌てふためく姿を思い出しては、にやにやしていた。

「奈緒ちゃん……早くいきましょ」

先ほどまでは打つて変わつてクールな表情で、彩葉は追跡を促す。

屋上でのきりつとした表情。あれは間違いなく、新しい工口本を買に行くときの決意を新たにする顔だった。

百戦錬磨の兄ウォッチャーである奈緒にとつては、ささやかな動作から修輔の習性を見抜くことなど造作もない。何か工ロイことを考えている、と告げて一人して空き教室までつけてきたのだ。

そつとして案の定、このままである。学校でわざわざ工口本を広げるとは、さすがお兄ちゃん。いやせめて放課後にしろよ。

「ああ、修ちやん。そんなにたまつてなんて……」と呟いていた彩葉も、工口本が妹モノだつたのを見て表情を変えた。修輔から工口本を取り上げる、という羞恥プレイの提案にあつさり乗ってきた。「ふふん、たまにはこうやって苛めてあげないとね」

要は憂さ晴らしである。奈緒も彩葉も、最近修輔が近藤蘭香に熱をあげているのは知っている。正しくは、近藤の黒パンストにだが。修輔に想いを寄せている兩人としては、これが面白いはずがない。とはいえたパンチラ、パンストチラを咎めるることは難しい。

実行現場を押さえて、言い逃れできるし、そもそも反省の色が全く見えない。奴の煩惱はそんなことで収まる代物でないというのが、二人の共通見解だった。

それならば、せめて工口本を押さえたほうが何倍も精神的にはキツイ。

このあたりの快感は、戦国時代の「敵将、討ち取つたり！」に通ず

るところがある。涙田でじゅらを伺う兄も加えて、奈緒としては一度おいしい。

というわけで、一人が修輔をタックルでダウンせざるのこなつ時間はからなかつた。

「つーかまえた！」

「もひ、修ちゃんつてばやだなあ。彩葉から逃げられると思つてゐの？」

中庭で、見事に押し倒した一人は、勝ち誇つた顔で修輔にしがみついた。

（ふふ、お兄ちゃん討ち取つたり！）

彩葉が初心を忘れて頬をすりすりしているのを横田に、奈緒はお宝こと鞄をオープンする。

……のはずだつたのだが、そこからでてきたのは思いも寄らぬモノだつた。

「あれ？」

思わず、鞄を逆さにして中身をぶちまける。ぼとん、と筆箱がひとつ落ちてきただけだつた。

「中身が、ない？」

何もなかつた。かばんの中身は、空っぽだつた。

（は、まさか・・・・・・）

私たちから逃げてゐる間に、お兄ちゃんが口本を捨てるなんて考えられない。だとしたら、どこかに隠したに違ひない。だが、そんなそぶりや隙は見当たらなかつた。

（そつか！彩葉ちゃんが抱きついた時だ！）

あの時かばんの中身だけを抜き取つて、机の中に隠したに違ひない。私と彩葉ちゃん、一人の天才ストーカーを相手に、プライベートの最後の一線を守つたなんて・・・・・・。

(お兄ちゃん……恐ろしい子…)

「ほら、予鈴予鈴。昼休みも、遊ぶのもおしまいだ。一人とも、さつさと教室に戻れよ」

しまった。これが狙いか。予鈴がなれば、今更あそこまで戻つて検分することはできない。

時間を稼ぐことが目的で、逃げ続けていたわけか。

(流石はお兄ちゃん……H口のことになると、IOが跳ね上がるのね)

「う、うん、わかった」

「じゃあね、修ちゃん」

安堵した笑みを残して修輔は去つていった。

\*

「ど、いつわけで近藤のB-L本を学校においてきちゃった」

「あsdf ghijk!..」

夜の公園。事の顛末を話し終えた修輔は、首根っこをつかまれ頭部を上下左右に振り回された。

午後の授業は殆ど居眠りしていたから、HRを寝ぼけ眼で終えて、家に帰つたのだ。だから昼休みのアレコレで空き教室に隠した本を、そのまま置いて帰つてしまつたということに気付いたのはつい先ほど。

近藤からの連絡があつたと同時に、返却の催促がされた時だ。

そうでもなければ、鞄を開ける理由はない。もちろん勉強などびた一文していない。弁当とエロ本校間のため以外には、かばんの中身など興味がないのが高梨修輔だった。

とことこで、昼間のアレコレでかばんの中身を机の中に突っ込んだ時、どうやら近藤から借りた本まで入れてしまつていたらしい。つづりアレは教科書の間に挟んで、帰るときに一緒に机の中に突っ込みっぱなしと思っていたのだが。

しかしそくよく考えてみると、空き教室でのあの時。机の中に押し込んだ本が、少しばかり厚かつた気も……。といつわけで、そのことを近藤に告げた結果が、この有様だつた。

「あああ陽介が浩介に花ふぐりとエッフェル塔がためでピサの斜塔に凱旋門が……」

意味不明の言葉を羅列しながら、取り乱す近藤。……いや、実はちよつとだけ意味がわかつてしまつあたりB-Lに毒されつつあると自覚する修輔。

しかしここまで取り乱されるとは、毎度毎度ドンだけおまえはB-L本がほしいんだよとばかりに、自分のことを棚に上げて思つ修輔。近藤がいる限り、出版産業はまだまだ安泰だろ。」

「で、でもあそこ教室は普段使わないから、別にちよつとぐらりと放つておいても大丈夫だつて」

「……今日の委員会で話された内容を知つていい? 空き教室を使つて、クリスマス会なんかのイベント用のグッズを置く場所にしようつて話。その片づけを、明日の朝から始めよつて……」

あはは。近藤が俯いて拳を固く握り震えているのを見て、修輔の額を一筋の汗が濡らした。

「終わりよ。もう終わりよ! 明日の話題はあのどぎついB-L本を放置しているのは誰かつてことでもちきりね。そして指紋が採取され、持ち主が特定されるのよ。そして臨時朝礼が決まって、皆が整然と並ぶ中で一人一人親指に朱印が押されて、見比べられて……」

ああああ、と頭を搔き鳩の委員長の姿に、もはや修輔では声をかけることさえ躊躇われた。

「ま、まつて。待ってくれ、近藤! まだ間に合つ! 今から学校に行けば、間に合つ!」

「え? それって……え、夜の学校に、忍び込むつてこと?」

「う、うんうん」

正直、近藤の妄想のようになるとは思わないが、念のためだ。それに、もともと置いてきた一冊は今夜ホンホンする用だった逸品だ。直ぐに使いたい。三回はイケる。

「そんなの……危ないわよ」

いきなり優等生らしい意見を口にする近藤。

「いや、あんなものを放置しておく方が危ないって」

と、内心思った修輔だったが、さすがに口には出さなかつた。

「まあ、俺の責任だし。ちょっと忍びこむくらい難しくないよ」

「でも、鍵はどうするの？ 校舎内に入れるかどうかも怪しいと思つけど」

む、確かにそうだ。当たり前の話だが、夜の学校は部屋の殆どが施錠されている。が、修輔の脳裏には閃くものがあつた。

「いや、実はちょっと抜け道があるかもしれない。そいつは、十分どうにかなると思つ」

「本当に……？」

心配そうな瞳で、じりじりを見つめる近藤。その姿に、修助の心は思わずホンホンした。

「大丈夫、問題ない！ 近藤のBL本のためなら、夜の学校にだつて、忍び込んでみせるさ！」

間違つた男氣を見せながら、公園をでよつとする修輔。

「ま、まつて、高梨君」

ちゃん、と服の裾をつかんでくる近藤。

「わ、私も……行くわ」

かくして、高梨修輔と近藤鶴香は、夜の学校に忍びこむことになつたのだった。

もちろん、その後に続く一つの影も、同様に。

ギャグものです。とはいえる原作が漫画、アニメであったこともあります。笑えるところがちょっと違うかもしれません。いろいろと試行錯誤しているところですので、よろしければご意見。ご感想の程よろしくお願いします。

学校への進入は、思いの外スムーズにすんだ。普段からAGEの会合の場所として人気のない場所を熟知している修輔にとつて、そして百戦錬磨の工口本ハンターとして夜の闇を音もなく駆け抜ける二人にとっては、潜入はお手の物だ。

もちろん緊張はしたが、それよりも問題は、

「きやつ」

委員長が塀からおる時に、足をかけそこなつたことだ。バランスを崩し、そのまま背中から倒れ込む委員長。その下にいたのが、他ならぬ修輔だった。

「ごめん高梨君・・・・・・大丈夫？」

「全然大丈夫！」

と、黒パンからいっさい田を離さずに親指を立てる余裕まである。

暗闇に 浮かぶ黒パン 眺しいな

見事俳句まで仕上げてしまう始末だ。十六茶のパッケージに印刷されていても違和感ないレベルだ。今度AGEの会合で発表しよう。そんなわけで、無事に構内に入つたときにはすでにボルテージはマックスに、ホンホンしながら裏庭を進んだ。

「とにかくさ、ほら。ここ」

「やっぱり、鍵がかかっているみたいだけど、つて……ええ！？」

「ほらな。やっぱり」

そう言つて修輔はガラスがはまつたままの窓を手にして、近藤の方へ振り返つた。

「こじらへんはよくボールで遊ぶやつらが割っちゃつから、こうやつてニセモノで隠しているんだよ。美術室においてあつた、アクリ

ルを嵌めこんでね。もともと汚れていたから、ちょっと汚しておくれとみんな気付かないんだよな。掃除をさせられるのは、生徒ばっかりだし」「

「へえ……全然、知らなかつた」

修輔だつて、AGEのメンバーから聞かされていなかつたら、知らなかつただろ?。ここだつて、隊長が「猫が忍びこむといけないから」となぜか動物図鑑を毎日眺めてちょっとヤバい目をしていた時期に気付いたのだ。

もつとも、AGE自体も学校の妙な噂や情報に常に敏感なのが。確か、変にエロいコスプレしている女子がいるとか話していた気もするし。

とにもかくにも一人して外付けの排気口を足場に壁をよじ登り、校舎内に入った。

とたん、と軽やかに降り立ち、丘田ショッピングで買つてきた懐中電灯をつける。

そこでふと、修輔は別の話を思い出した。

「そういうやあ、うちの学校の七不思議って知つてる?」

と、冗談半分に話を振つてみる。すると近藤はわかりやすいほどに、修輔の袖を握る力を強めてきた。

「そういう話は、後でしてよ……」

(おおおおお)

これは、あたりじゃないだろうか。

普段から夜中にあつたりするから考えもしなかつたが、よくよく考えてみれば近藤も人の子。人並みに幽霊やお化け相手に怖がつてもおかしくはない。

そう、この暗闇で一人つきりというのは絶好のシチュエーションなのである。

(学校の怪談よりも、大人の階段だ!)

などとうまいことを思い浮かべつつ、攻めの一手を考える。

まあまあ、と余裕を見せながら、とりあえず話を振つてみる。

「ええと、銅像が女性とのパンツをのぞこりとしてたまにかがみこむとか、踊り場にある鏡から女子のスカートをのぞこうとする老人とか、男女カップルがいやついていると、幽霊が柳の陰から恨めしそうに見ているとか・・・・・・」

「な、なんだか偏った怨念の幽霊ばっかりだね」

「そんなことないよ。ええと、あとは、そう、トイレに居ると真つ赤な血走った眼をした女教師が、若さに嫉妬して「泥棒猫！」つて言つてくるとか」

「なんだか昏ドラが混じつているような……」

などと適當な話をしているうちに、例の教室までついてしまった。階段登つて、廊下を歩く。もともとそんな複雑なルートではないし、当たり前だが。

うーむ。どうやら話のチョイスを間違つたようだ。

しらけた空氣のまま、空き教室のドアに手をかける。が

「あちや、鍵がかかってる」

普段から空いていると言つても、夜になれば話は別

どうやら、きちんと先生達も鍵をかけてしまつているらしい。

「困つたなあ・・・・・・」

といいつつ、廊下ぞいの教室の窓を確認してみる。手の届く範囲では、やはり閉められている。

となれば、と思いつたのがドアの上のガラス戸だ。懐中電灯で照らすと、案の定鍵は閉じられていない。

しかし問題は、そこまで手が届かないことだった。しかも、足場になるものがない。隣にある個人用ロッカーは重くて動かせなさそうだし、どうしたものかと顎に手を当てる。

「高梨君、どうする？」

おろおろと、困つた顔の近藤を見つつ、すぐさま回答が出た。

「近藤、俺が足場になるから、代わりに上のガラス戸から入つてくれないかな」

「うーん……やつぱりそれしかないようにね」

やはり近藤も考へてはいたようだ。

近藤も女子にしては結構な身長があるし、自分の背中に乗れば、難しことではないだろ？。

「あ、靴は別に脱がなくていいよ。中の方が掃除されてなくて、汚いだろ？」

そういうと、戸惑いながらも、一応承諾してくれた。

「それじゃあ、しつれいして……いいかな」

かがみこんだ姿勢の

しかし「こ」にきて修輔は氣づいた。近藤に背丈があるといつては即ち、その分でかいとこつことに。

「はがつ……！」

とこつ声を喉の奥で誰にも聞こえずに絞りだせたのはひとえ男の意地によるものだった。

「だ、だいじょうぶ？」

とはこえなんとなく体が震えていたことには気づいてこないようだ、遠慮がちに言つ近藤だが、「いこから……」と絞り出すと察したようで、すぐさま上の戸をがちやがちや言わせ始めた。

「いめん、ちよつと……建てつけが悪いのかな、開か、ない……」  
懐中電灯を持つ手を変えつつ、必死に動かそうとする近藤。  
修輔はひたすらに歯を食いしばりながら、耐えていた。

（段々気持ち良くなつてきた氣がするな……）

\*

「きこいー何よ、あの女ー修ちゃんを足蹴にして。色氣を振りまいて、男をどういづするなんて、とんだ雌猫ねー」

（こや、彩葉ちゃんがいえた立場じゃなによそれ）と内心で突つ込む奈緒。

今日も今日とて修輔の生態を影ながら見つめる少女たち。彼女たちもまた、学校へと侵入を果たしていた。基本的なルートは修輔たち

の後を追つただけなのが、その装備のレベルが違つた。

まず修輔と近藤が懐中電灯を買ったのを見るや否や「後をつけておいて」と去つていった彩葉。奈緒のもとに連絡が来た時、彼女の手には予備の隻眼線スコープが握られていた。

というわけで、今回は一人して赤外線装備での完全な不審者ルックである。正直、今学校で捕まる、修輔たちより百倍やばいのだが、暴走する彩葉を止められる奈緒ではなかつた。

（私……汚れちゃつた）

などと被害者ぶりながら装着した奈緒だが、いざつけてみるともうそれどころではなかつた。修輔のホンホンつぶりが伝わつてしまし、一時も眼を離していい暇がなかつた。一人無音のまま様子を窺つてきたわけだ。

もつとも、今のところの状況から察するには、どうやら特に何事もなく終わりそうなのだが。奈緒はすでに、いつも通りの兄ウオッち状態で楽しんでいた。

「さすがはお兄ちゃん。お母さん相手の土下座で鍛えた足腰は、伊達じやないわ！」

「それは、鍛えられるものなの…………？」

などというハイレベルな会話を交わしながら、一人のストーカーは耳をすませる。

と、そこでようやくガラス戸が開いた。

\*

自分たちが見られているとつゆ知らず、二人は無事問題の場所へとたどり着いていた。

「お、あつた、あつた」

と、修輔は肩の荷が下りた顔で、机の中からブツをとりだす。書店の紙袋の中には、やはり予想通り本が二冊入っている。

「よかつた……」

と、まるで離れ離れになつていた子犬を見つけたかのように、ぎゅぎゅ

「う、と抱きしめる近藤。こうしてみる分にはかわいらしい気もある。……腕の中の本の表紙が、美少年同士の睦みあいでさえいなけば。

まあ終わってみれば呆氣ないものだ。

修輔は帰ることを考えた。

鍵をあけっぱなしというのはまずいだろうか。いやまあ、何も取られてをえいなければ先生達だってかけ忘れだと判断するだろう。普通にでよう。

「そんじゃあ、戻ろうか、近藤……近藤？」

「た、高梨君。その……」「

ところが明らかに、近藤は普通じやなかつた。いや、もともとあれだけどそりじやなく。

顔を赤らめ、もじもじさせて、恥ずかしそうな顔で、修輔に何かを伝えようとしている。

(「、これはエロイベント発生か！ やはり委員長は俺のことが好きで、この密封された二人きりの校舎とこうオーソドクスかつ王道の場所にいたつて、Bしに向けていた劣情と色情のリピードーがすかさず俺の元にロックオン、暗闇の中でのドキドキと俺への思いが吊り橋効果と相まって相乗効果を見せ、その力は一乗、三乗に、そして欲情にいたつたということなのか！ うまいことこつた！ だとしたらここはかつてない好機！ 関ヶ原にして決戦の地。さあいぐぞ高梨修輔。即座にバージして、ここは保健室に無理やり侵入して決戦のフィールドに……）

ところが、通常の百倍の脳内演算速度を獲得していた。

「あ、おしつこが……」「  
かけるのー？ 俺にー！ー！」

高速のレスポンス。

足を踏まれて、グリグリされた。

「痛つ……？」

「そんなわけないでしょつ……もう。されど、いや、ないんだからあ……」

暗がりで顔は見えないが、声音が震えているのは確かだ。

「わかつた……飲めばいい、のか」

「ばか、バカバカ！」

踵で指先を狙つてきた。小指はやめてほしかつた。

「トイレに行きたいの、トイレに！」

「どうやら、ときめき」の褒美イベントではなかつたらしい。修輔はため息をついた。ハイテンションモードも雲散霧消した。まだまだ委員長のCGギャラリーを埋める日は遠いよつだ。

\*

「こつたい、どうこつことなのよ……」

と、ここで気が気がないのが彩葉だ。

「まつて、ここでばれちゃうのはまずいよ」

「それは直ちゃんの都合でしょ……このまま指を加えて、一人がトイレでやるのを見ていらつていうの！？」

ガコンガコン、と頭部につけた暗視スコープを奈緒にぶつけながら、彩葉は憤慨する。

二人して何やら微妙な空気が流れているのを察しながら、おそるおそる後をつけていたのだが、女子トイレの前にさしかかって、どうとう彩葉がしごれを切らしたのだった。

おでこをさすりながら、奈緒がなだめる。

「痛い、痛いよお。こんな暗がりで出来るほど、お兄ちゃんはタフじゃないって」

「何言つているのよ。盗撮ビデオとかみたことないの！？」トイレは

用を足し、精を出すところなのよ！常識でしょう！」 小声で怒涛の勢いといつ矛盾する行為をやり遂げた彩葉。

（それはどう考へても彩葉ちゃんだけだよ）

と、ツインテールを冷ややかに見つめる奈緒。 その態度にますます油を注がれたのか、

「もう、話にならない！ 様子を見てくる！」

「すかすかと、彩葉は大股で進んでいく。トイレとは正反対の方向に。

「い、彩葉ちゃん？ なんでわざわざ、そっちに……」

果てしなくいやな予感を覚えつつ、止める気力がわかないままため息をつく奈緒だった。

\*

「な、なんだかほつとしたら、もう我慢が出来なくなっちゃって……」

（今のはフレーズだけ聞くと、Hロイな）「うめん、聞こえなかつたんだけど、今の」「

「と、とにかく……トイレに行くから、ついてきて！」

修輔のささやかな謀略は失敗し、二人はトイレにまでやつてきたわけだが、

「そ、その……絶対、動かないでね、高梨君」

「はいはい、わかったよ……」

トイレの中からの声に、やる気なく答える。

「絶対だからね。高梨君だけが、頼りなんだから……」

暗がりの中、静寂の中、いつもは見せない不安げな表情と震えた声でそう言われて、ドキリとしない男子はそうはない。修輔も例外ではなかつた。

心配ないよ。逃げたりしない。そんなイケメンくさいセリフが喉からせり上がってきたのだが、

「ちゃんという通りにしてくれたら、あとで」「褒美をあげるからね

「「」「ほうび………………！」！」

キーワード一つで脳内が一気に「口」で埋め尽くされた。ホンホンしながらアレコレ考えてこらへりつむこ、近藤はおやおやするトイレの中へ入つていった。

とはいへ、やはりいや一人になると、心細くならないほうが難しい。（駄目だ、怖がつてたら。考えたら、負けだ。そうだ、もつと楽しむことを考えよう）

（今、俺のすぐ後ろでは近藤が、パンツとストッキングを脱いでいるのか……）

その瞬間が見られないことが恨めしい。女子トイレの入り口を鼻息荒く見つめながら、修輔は考える。

……せめてストッキングだけでも近藤が履き忘れて帰つていいくという展開はないのだろうか、と。

\*

（流石はお兄ちゃん、心細い顔になつたと思つたら、あつといつ間にいやらしい顔になつちやつた！……）

改めて兄の業の深さに感銘を受けつつ、奈緒もついつい気が散る。

彩葉の早とちりはともかく、一体どこにいたのか？

若干明らかにいやな予感がしつつも、やはり兄ウォッチこそが趣味であるとばかりに、一人ぼつんと佇んでほんほんする兄から眼を離せなかつた。

「キヤアアア…………！」

近藤の悲鳴が、校舎にこだまするまでは。

「どうした、近藤！」

あわてて修輔がトイレの中に踏み込んだときには、トイレの床にへたりこんでいる近藤の姿だった。

懐中電灯をつけて顔を伺えば、恐怖におびえ、啞然とした表情蛾見えた。

流石にその態度を見て、「人生初の女子トイレだ！」と喜んでいる場合でないことを察した。

「あ、あそこに」

近藤の指さす先へ灯りを向ける。校舎裏の茂みだ、

「あそこから、何か光る目がこっちを見てたの」

「……何もないよ」

此方の腕をつかんで、首を振る近藤。悪い冗談ではないのは確かのようだが。

と、そこで気づいた。近藤の袖口が湿っていることに。

「あ、やだ、これは手を洗っている時に水がはねただけだからね」あわてて弁解する近藤に、とりあえず頷いておく。

（なぜ俺の目に、フラッシュ機能は付いていないんだ！）

どうやら事後のようだ。ハンカチを拾っているところを見ても、そうだろう。

心の中で地団太を踏みながら、修すけは脳内シャッターを切つて下半身をチラ見する。

当たり前のことだが、黒パンストを履いている。

どうやら全ての希望はついてしまつたようだ。

修輔は深いため息をついた。

いや待て。

修輔の中の何かが行つた。先ほど濡れた袖口。なにもただの水とは決まっていなかないのではないか。

真剣に窓の外を探すふりをしながら、胸中であれこれ考える修輔。全ての答えは、今さつき近藤の袖口がふれた自分の手にあった。

まずはくんくん、と匂いも嗅いでみる。やはり所詮はトイレの臭いだ。

念のため、こいつそり手の臭いをかいだが、臭いはしなかつた。鼻につっこんでまで確認したが、やはり臭いはしなかつた。

水は無臭である。

（なんだろう、何か残念な気がするのは・・・・）

こうして、修輔が新たな性癖を開拓することはなかつた。

ただただもやもやした感覚を覚えながら、窓の外の闇を見つめる修輔なのだつた。

\*

「まったく。失礼極まりないわ。人の顔を見て叫ぶなんて」

いろはは一人憤慨していた。

再びトイレに面した廊下の角である。

修輔がトイレの中に入つていつたと思つたら、案の定、彩葉が戻つてきていた。

そうして近藤の悲鳴の原因が何なのか、自分の予想が的中したことを知る奈緒だつた。

「茂みからちよろつとみていただけで、ばれてはいないと思つけど……幽靈に間違えるなんて、どうかしてるわ」

そう言つてふんふんと頬を膨らませる彩葉。赤外線ゴーグルをつけているから当然だが、どんな目をしているのかまではわからなかつた。

「彩葉ちゃん・・・・・鏡見たことある?」

「そんなものを見る暇があるなら、修ちゃんを見てるわよ」

ストーカーの鏡だつた。

「まあ、当初の目的通り修けやんの童貞は無事守つたから、よしとしますか」

み「ことやり遂げた顔で言い放つ彩葉に、奈緒はジト目を送る以外の対応を思いつかなかつた。

「……そんなことよりも、まずいよ」

奈緒が窓を顎でしゃくる。

彩葉が顔をのぞかせてみると、隣の事務塔の扉が開いていた。

\*

やばい。高梨修輔も間もなくその事実に気付くと、慌てて懐中電灯を消した。

「え、高梨君、突然何」

「やばいよ、近藤！ 人が来るかも！」

蛇口をきつちり閉め、あわてて廊下にでる修輔。あれだけの声を出した以上は、様子を見に守衛さんが来ると考えるのが当然だ。ひとまずどこかへ隠れるなり逃げるなりした方がいい。

そう判断しての行動だったが、トイレから近藤は出てこない。

「大丈夫だから。急いで」

再び中に入る。女子トイレ一回目。

闇に日が慣れてきた。その様子から鑑みると、ビリビリ近藤はへつぴり腰になつていていたようだつた。

「だ、大丈夫？」

「い、ごめん、足がふるえて」

あまりこの様子じや走れそうにない。かといつてこのトイレに隠れるというのも、賢い手には思えない。

そこで窓の外から、光が窓を通して壁に浮かび上がる。慌てて頭を下げて、壁にへばりつく。まずい。時間がない。

あたふたと周囲を伺いつつ、修輔は階段の踊り場にあるロッカーを

思い出した。

こうなれば方法は一つ。

「高梨君……」

「と、とにかくこちへ」

腰をかかえるようにして、必死に駆けだす。

階段をおそるおそる降りると、一階と二階の間の掃除用のロッカーの中のモップを隅っこに隠た。

そのまま慌ててその中に入り込む修輔。

「は、はやく！」

手を引かれて、近藤も思わず入つてしまふ。

そうして必死に内側から扉を閉めて間もなく、扉が開く音がした。  
一階からだ。

当然の話だが、ロッカーは人が入るために作られていない。  
だが、ロッカーの中には、ロマンが詰まっている。

修輔はそのことをこの田に学んだ。

近藤幽佳と睦み合つようべつたり張り付いている状態で。

不幸中の幸いと言つべきか、胸は近藤が抱えたB.L.盆が、股は修輔のエロ本が一人の間に挟まれていた。ほんとうによかつたよガツデム。

しかし、密着は密着近藤の肌が、その柔らかさが、黒パンストが、修輔にダイレクトに接触してきていた。これに何も感じない男がいるはずもない。

ホンホンホンホンホンホン！――！

(あ)

それから近藤の臭いがした。奈緒とは違う、シャンプーのにおい。  
思わず髪の毛に顔を埋めたくなるような、鼻孔をくすぐるいい香りだ。

「た、高梨君……」

近藤が何かを言おうとしていたが、直ぐに再び黙ってしまった。  
魔もなく、階段の下を通る足音がしたからだ。

二人必死に息を殺す。ただし鼻の穴は全開で。近藤の匂いごと酸素と一緒に修輔の脳に送り込む。

（た、たまらん）

（い、いや。だ、駄目だここで獣になつたら……いや、でもオレ近藤のペットだし、いいのか？野生に帰つちゃつても、それはそれでペットの本能ということじで、しようがないんじやないかな！むしろバターで一ワンワン…。）主人さまと、遊びたいワン…）

かつてないスピードで自分に都合のいい論理を組み立てていく修輔。そんな葛藤をする修輔は、自分のドキドキが気取られるのではない。かと必死に近藤の様子をに窺う。

そこで気づいた。

近藤の体が、小さく震えていることに。

そうしてまだ近藤が怖がっていることに、修輔は罪悪感を覚えた。こうやって本を取りに来た自分につきあいさえしなければ、こんな風に怖がることもなかつたのだ。わざわざ

「だ、大丈夫だから」

だから、自然と口がついて出た。

「あ、あのさ。幽霊の話とか、実はさつき話したのだつて、ほら、ほとんど出鱈目なんだよ。確か運動分の奴らが合宿で肝試しするためを作つたとかでさ。うそっぱちなんだ」

「え・・・・・それって」

小さく化の鳴くような声が、震えている。それを消しきれる様に、出来るだけ平静を裝つて修輔は続ける。ほんとうだ、と。

「だから、ほら、近藤が見たのだつて、俺が言つた話に怖がつたせ

いで、なにかを勘違いして見ただけなんだよ

「そう、かな・・・・・・・・」

「そうだって。ていうか、何か、消火栓の光がガラスに映ったとか、そういうのかもしれないし。大体なにもなかつたんだから、それでよかつたんだって」

「高梨君・・・・・・」

修輔の拙い話か、その態度に感じるところがあつたのかわからない。けれどもいつの間にか近藤の震えが止まっているのに気づいた。

「そう、だね」

「ふふ、と笑う声が聞こえた。

それで修輔はよかつた、と胸をなでおろせた。

顔は見えない。けれども、聞こえる音から修輔の目の前に顔があることが感じ取れた。

二人真っ直ぐ、見つめ合つ位置に居ることに。

「……大丈夫？」

うん、と近藤は

「そういえば、高梨君。この前部屋で女の子一人に抱きつかれていったよね」

突然そんなことを言つてきた。いや、確かに思いだすかもしないけど。

「いや、まあ、あれは、向こうが勝手に……」

焦る修輔。しかし近藤は楽しそうに、笑う。

「私は、じついうの初めて」

「う……」

「高梨君は、私の初めてばっかりだね」

そう言われて、この時初めて修輔は、胸の奥が締め付けられるのを感じた。

ホンホンではない、別の気持ちだ。

それが何なのか、修輔はふと巻がそうになる。

そこであちゅうど、再び足音が聞こえた。そのまま一人黙り込む。

沈黙が、永遠に続くように感じられた。

時間にしてみれば一分もなかつたその時間だけれども。

近藤の真その鼓動と、自分の鼓動。その二つが、重なつてゐるのを感じた。

そうして再びドアが開き、閉じられる音。カチャリと鍵が再び閉められた。

どうやらなんとか事なきを得たようだ。

本来なら、ため息の一つや二つは出るところだ。

けれども、お互い動こうとしない。どうすべきか、どうしたらいいのか、ちつとも思いつかなかつた。

が、そこでどういうことか、股の間の雑誌がずり落ちそつたのに気づいた。

（い、いかん！）

流石の修輔も、その流れはアレなことに気付いた。それはエロマンガでしか許されない流れだ。今は少年誌的な流れ！

が、そんなこんなで体を動かそうとしているつちに、お互いに姿勢を崩してしまつたようで、

「あ

と、ロッカーが開き、二人絡みあつたまま外に倒れこんでしまつた。

「痛たた……」

眼をしばしばさせる近藤。修輔はかるうじて近藤をクッショングにすることなく、地面に着く前に両手両膝をついて態勢を守つた。手だけは近藤の頭の下に差し込んで。

即ち、修輔が近藤を押し倒す態勢になつてゐるわけだ。

「た、高梨君……」

心持ち、つるんだような瞳で此方を見つめる近藤。

「これは、これは、もう、行くしかないんじゃないだろ？」「腕の中のB-LINE本がちょっと気になるが。」ここはカットで。

「あつ、と自分なりに作れる精いっぱいの顔で近藤を見つめる修輔。近藤も闇の中で、此方を見つめていた。

「行くしかないぞ！-高梨修輔！」

と、そこで携帯が振動した。

修輔は近藤から眼を離さず、その態勢のままで、ポケットから携帯を抜き出し電話に出た。

「ただいまおかけになつた電話番号は使われて……」「もしもし。お兄ちゃん？」

奈緒だった。思わず展開に、修輔は近藤の上で固まる。

「な、奈緒……どうしたんだ？」

「お兄ちゃん？ 今どこに居るの？」

「どうして……？ せ、散歩だよ散歩。今日も月がきれいだから、その」「だから、どうしてひょっとして、×公園？」

「え、まあ、そ、そ、うだよ」

「うなんだ。じゃあ帰りにAマート限定抹茶バナナフロートも買つておいてくれない？ 近所でしょ」

「え、あ、おお、もちろん、いいよ」「うもどりに言葉を探す修輔。本当は公園まで結構な距離だし、

Aマートまで足を運ぶのは手間なのだが。話の流れ上、やむを得ない

い。

まあいい。とにかく、奈緒の目的はこれで完了だらう。このまま何事もなかつたかの様に近藤に覆いかぶさつてしまえば……。

「ありがとう。ただし、気をつけないと駄目だからね。夜道は危ないから」

「誰かれ構わず押し倒す、変質者がいるかもしれないし、ね」

ぶつん、という音が修輔の耳から聞こえた。

「た、高梨君？」

瞬間、修輔の体が跳ね上がる。

思わずあたりを見回す。誰もいるはずがない。いや、当たり前だ。奈緒はまじめで優しくて素敵なお兄ちゃんがこんなことをしているなんて知るはずもないのだから。

だがしかし、奈緒の一言は耳元から冷水を流し込まれたように、修輔の頭を急速に冷やしていた。

「か、帰ろう!!!!近藤、こんなことしてる場合じゃない!!!!任務は完了した。脱出だ!」

「え、う、うん」

どこか赤い顔になつた近藤に気付かずに、青い顔でロッカーの中身を元の位置に戻す。そのまま近藤の手を引いてすたこりせつせと学校を脱出する。

いますぐ、いますぐ帰らなければ。

どうにも凄まじい後ろめたさと焦燥に駆り立てられて、修輔は走つた。

近藤に感じていた何かは、何処かへ飛んで行ってしまった。

そうして学校を出て五十メートルほどのところで、二人は今夜の任務を完了として、帰宅についたのだった。勿論修輔は抹茶バナナフロートも忘れずに。

\*

「ふう、やれやれ」

裏庭の茂みから顔だけ出して、夜空にため息をつく奈緒。

守衛にだけは見つかるのは御免と、彩葉が先ほど覗きを敢行した場所まで脱出した二人。修輔たちの安否を心配していたのも僅かのこど、すぐさま踊り場の窓に映る一人が見えたのだ。そこから彩葉が取り出した双眼鏡を使ってウォッチしていく、そしてあの状況を見た。そこでしごれを切らした奈緒が、携帯を取り出したわけである。「さすがは、っていうところね」

「お兄ちゃんとの付き合いは、多分、彩葉ちゃんより長いからね」「ふふん、と勝ち誇る奈緒に、彩葉はくやしそうに歯噛みする。

「それにしても……修ちゃんに押し倒せるなんて、あの泥棒猫め……今に見てなさいよ、修ちゃんは渡さんんだから!」

「彩葉ちゃん、表現が昭和だね……」

そんな奈緒のつっこみを受けてか知らずか、彩葉は鋭いまなざしを奈緒にも向ける。

「ま、いいわ。今のところ、修ちゃんに押し倒されたのは、あの子だけじゃないしね」

「む」

先ほどのお返しとばかりに不敵に笑つて見せる彩葉に、眉根を寄せる奈緒。

現在でこそよくわからないまま共闘関係にある一人だが、もともとは仲良子よしといつわけではない。恋のさや当てに、ルールなどない。

一瞬剣呑な空気に変わりかけた一人だったが……。

「やつぱり、やめとこ」

「そうね

同時にため息をついて、そんな気分は霧散した。夜の学校でああだこうだというなんて、バカらしいことこの上ない。ましてやお互い暗視スコープを嵌めたままの奇人ルックである。

傍目にもアホすぎる。

「あーあ、結局何もなかつたし。今夜は疲れたわね」

「まあ、何か間違いがあつたら困るんだけどね」

夜道を並んで歩く二人。思わずあぐびが出た。我ながら今夜も遅くまで、ご苦労なことだ。

夜中にわざわざ呼び出されて、「ななこ」までして……。

そうして奈緒の頭に一つ閃くことがあった。

「彩葉ちゃん」

立ち止まり、声をかけてきた奈緒。訝しげに彩葉が首をもたげると、「ちょっと面白いことを思いついたんだけど……彩葉ちゃん、聞かない？」

奈緒が、怪しい笑みを見せた。

\*

さて後日のこと。

なんやかんや行って、善良な学生でもある一人のこと。夜半に学校への無断侵入ということにはそれなりに気をもんでいた。が、幸いにも警備員さんはやはり気付いていなかつたということ、泥棒が何かを盗つていつたということがなく、問題はうやむやにされた。ただどうも居眠りしていたことはバレて怒られたらしく、守衛さんは普段より疲れた顔を見せていた。

良心がちょっと痛んだ一人は、守衛さんに各自贈り物をしてその

埋め合わせとした。

近藤はなんやかんやの理由をつけて、お手製のお菓子を差し入れした。

修輔もなんとなく罪悪感を覚えて、お手製のエロ口本をそっと放課後に部屋の前に置いておいた。アキバのガチャガチャで当たった、年が近めの熟女モノで固めておいたので、気にいるといいのだが。二人の関係はあれからも特に変わることはなく、ひたすらよくわからぬペット生活を修輔はつづけていた。修輔はなにかを忘れている気はしたけど、エロ雑誌の発売日と共にそんなものは消えた。

ただし、妙な噂を耳にした。

夜の学校で赤い目の中の幽霊を見た生徒は、夜中に出歩くたびに追いかけられる、という話であった。いつの間に七不思議のひとつに加わっていたその話について、近藤はなんとも青ざめた表情で聞いていた。

それを楽しそうに話していたツインテール少女とは正反対に。

かくして暫くの間、高梨修輔が夜中に呼び出されることはなくなり、静かに眠れる夜が訪れた。

もちろんそれは僅かの間であり、またエロ口本とエロ兄貴を巡る荒ただしい日々はやがてくるのだが。

「今はお休み、お兄ちゃん

奈緒は静かに本を閉めた。

兄が安らかに眠るつていうイラストを描き終えた性態観察日記を。

了

## 後日談（蛇足）

「おかしー……絶対におかしー」

教室で一人惰眠をむかはる修輔を教室のドアからおやむおやむ見て、奈緒は呟いた。

あれから呼び出しは減ったし、夜中の呼び出しも明らかに減った。だといつのに、あれから修輔の調子は一向に良くならない。朝もふらふらしているし、普段から眠ねりにしてばかりいる。

「一体、どうして……」

「甘いわね、奈緒ちゃん」

によきりと横から顔を出してきた彩葉。その顔は、真剣そのものだつた。

「い、彩葉ちゃん。何か知っているの？最近呼び出しあいないみたいなんだけど、お兄ちゃんが……」

「七回よ」

「え？」

「修やんは、七回までイケるよつたのよ……」

ドガーン、といつ背景音と共に、衝撃の告白をする彩葉。奈緒も眼を天にして、思わず再び視線を修輔に戻した。

こけた頬に青白い顔色。細い腕にバカそつた寝顔。  
けれども

(ち、流石はお兄ちゃん！予想の斜め上のクズつぶりだねーーー！)

けれども奈緒には一層、修輔の姿が輝いて見えるのだった……鈍く。

おじまい（人間として）

## 後日談（蛇足）（後書き）

とこうわけで、いかがだったでしょうか。

『お兄ちゃんのことなんかぜんぜん好きじゃないんだからねーーー』

の

二次創作小説は。

漫画の二次創作ということで、小説ではお見苦しいところもあつた  
と思いますが、お楽しみいただければ幸いです。

個人的には、原作はセリフ回しや表現がぴか一だつたと思うので、  
少しでもそこに届くようなものになればと腐心したのですが、どう  
でしょう。ご意見いただければ、それが厳しいものであれ励みになります。

それから最初の投稿からずいぶん間が開いてしまって申し訳ありません。  
せん。最初反応がなかつたため一人ナーバスになつていていたのですが、  
感想に先日気付いて無事に書き上げることが出来ました。

ネットであれば何であれ、作品を公衆の場に出すということの意味と  
責任を改めて感じました。一月前より読んでいただいた方には、改  
めて深くお詫び申し上げます。

読んでくださつた方は、本当にありがとうございました。  
しようもない話ではありますが、笑つていただければいいなと思う  
のですが。

駄文長文、失礼いたしました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7326s/>

お兄ちゃんのことなんか、夜の学校に忍びこんでも、ぜんぜん好きじゃないん

2011年6月5日13時12分発行